

いて解こうとするもので、渡邊氏の所論を發展的に繼承すると共に、最近學界の要求に答えるものと云えよう。このように部民の類型が政治史的社會經濟史的に把握された結果、それぞれの類型の歴史の意義が注意に上り、古代史の再構成が浮彫りにされて來る。(1)の品部にあつては、伴造の私民に近い品部から、氏(うち)にはなく官司に隸屬する品部へと發展するとされ、「官司制の成熟」として定義づけられる(三八頁以下)。(2)の屯倉においては勞働奴隸制の屯倉や徭役制の屯倉より貢納地區としての屯倉への推移が考えられ(六三頁)、それは「大和國家が皇室直轄領貴族直轄領を、本來は治外法權的な國造領の中に敷設してゆき、總體として大和國家の直轄支配が全國化してゆく過程」(六一頁)に相應するものであつて、「私有地民制の發展」として捉えられている。(3)の子代名代と部曲については、「その發生の契機が村落の外から、そして氏族制の關係を打破することによつて成立して來る」(八二頁)ことが指摘せられ、これまた「私有地民制の發展」の一面として理解される。すなわち大化前代は政治史的に

は官司制を、社會經濟史的には土地及び人間所有を基軸として展開するとされる。言を換えれば、「官僚的な統一支配の成熟」と「大和朝廷の直轄領の擴大」(八七頁)とであつて、この見解に立つ時、大化改新は歴史の動きの必然の結果として容易に理解でき、又その意義も明確となる。大化改新の本質について、かつて學界を支配したカタストロフエントオリーの解釋を克服するための一つの支柱を與えたのであつて(二五四頁)、これも本書の持つ最も大きな功績の一つであろう。歴史の發展性に對するこのような認識は律令制と部民制との聯關についての考察(八八―九二頁)にも見られる。こゝでは、律令官制は單なる唐制の摸倣ではなく、「品部制を下級組織としてその上に官僚貴族階級の爲の四等官制を置いた」(八九頁)ものであることが明快に論證された。

なお論ずべき問題は澤山残つているが、紙敷を越えたので残念ながら筆を擱かねばならない。以上の拙論が概ね第一論文「部民の研究」に集中し、雄辯「大和國家の軍事的基礎」に及ぶことができなかったのは評者の不

手際による。著者ならびに讀者諸賢に深くおわびしたい。

(昭和二四年七月思案社刊、A5、三五八頁四二〇四)

直木孝次郎

村田數之亮著

「エーゲ文明の研究」

エーゲの美術品は漸く十九世紀末に初めて發見されたものであるが、その繪画に現はれた輕快な趣向や可憐な風情やまた洗練された色彩と意匠などによつてどこか日本人の感覺に一致するところがあるらしく殊に美術家達の間で早くから好まれました愛されてきた。といふことは云いかえればエーゲ文明は一般に藝術的關心の對象としてとゞまつていたのであつて、その歴史上の意義或は問題の所在は殆んど未開拓の分野として殘されてきたのである。もともと發見研究が極めて最近の成果であるが爲に、我が國に於ては時間的にも尙取り組みにくい對象であつたが、更に實物觀察不能な日本の西歐美術史及び考古學研究

に於ける一般の困難が大きな障害としてその前に存在していた。此の對象に向つてどの方面から分析の手をつけるかは鋭い藝術的感覚と豊富な學殖とを併せ持つ人によつてのみ可能なことであつた。

村田教授の「エーゲ文明の研究」の發表は此の點のみにても尊敬すべき勞作であり、また單にエーゲ文明の最初の學問的研究であることのみならず、方法論上からも貢獻するところが多いものである。

さて、シュリーマン以來人々の襟を正しめる諸研究家の努力の結果、現在の段階に於ては、エーゲ文明の中でクレタ文明とエーゲ文明が質的に一應異種として考え直す必要がありはしないか、またそれと關聯してクレイタ、ミケーネ兩文明また兩者を含むエーゲ文明と、古代東方文明或はギリシア文明との關係如何、即ちヨーロッパの直接の祖は何れにみるべきかという大きなヨーロッパ史、世界史の問題に目標が定立される（第一論文エーゲ文明研究の發達史）。

しかるに資料が大部分美術の領域に限られ未だクレイタ文字の解讀されない現在、方法

はおのづから美術史の傾向をとらざるを得ない。此處で先づ美術史は如上の目標到達の爲に、單に作品の詳細な觀察による敘述やその素材や技法の研究にとゞまらず、更に様式乃至表現型態の分析抽出を通じてクレタ美術の本質更にはクレタ人の心性把握に及び、しかる後クレタの性格の近縁と歸屬を推定しなければならぬ。美術史は精神史否ひらく總轄的歴史の機能を發揮するのである。その點にまた此の著に對する毀譽褒貶の生れる理由が予想せられる。由來殊に美術家側に於ける美術史に對する不滿の多くは、藝術創作にかゝわる感覺或は技法の點に何ら訴えるところがないことに對してなされた。予想せられる此の著えの不滿もまた或はこのようなものである。しかし本書はより多く歴史學的意圖によつてなされたものであることを理解する時、かえつて我々は著者の鮮やかな美術史の歴史學的驅使にこそ讚美を送らねばならぬ。

技法的、心理的、様式的などのあらゆる美術史の方法を併用しつゝ、且つ考古學や宗教心理學によつて推論に補足を加えその間に印

象主義や日本画と興味ある比較をはきんで、結局エーゲ文明とミケーネ文明は異質のものであること、即ちクレイタ人はエーゲ化する古代東人であつて、その本性は古代東方的な非論理的心性のエーゲ世界化であつた、そしてミケーネ文明とは論理性をその本性とするものであつたから、本質において全く相反すると推論される。

しからばギリシア文明に對して、なほ統一體としてのエーゲ文明を認めることが出来るか否か、此の問題に對してはクレイタ及びミケーネ文明は本性においてとはなくて、歴史的形成として一つのエーゲ文明をギリシア文明に對して對立させることが出来ることと結語されるのである。最後の推論に際しては政治的・風土的・社會經濟的差異をも考慮に入れる周到さを示されている（第二論文クレタ文明の性格）。

實物を觀察する機會に乏しいといふことは美術史或は考古學に携はる者には拂ひのけることの出来ない不安と宿命的な限界を感じさせるものである。此の困難をいささかでも打開しようとする場合、その方法としては權威

ある外國研究の綿密な参照が必要である。或は感覺のみに頼らないで可能な限り變化ある觀察例えば、題材の心理的解釋を重んずるが如き方向をとることも一つの方法である。制約された環境にあつては寧ろそれこそ正道と看做さるべきである。此のエーゲ文明史はその自覺の上の努力の所産でもあり、この方法がしかも大きな歴史學的役割を果すことまで飛躍することによつて獨自な生命を獲得しているのである。

第三論文「クレータの『フリーストキング』崇拜について」第四論文「ミケーネの『英雄崇拜』について」第五論文「メガロン考」はいずれも既發表のものに加筆されたものでエーゲ文明の本質解明にそれぞれ立場から寄與している。すべてこのような題目の取扱いは、やゝもすれば靜的な把握に終り易いものであるが、これ等の諸論文は一般の歴史的推移と關聯しつゝ、生成の動的な面をもあとずけている。此の點にも讀者は一つの模範的な敘述を學ぶことができよう。

内容の豊かな本文に加えて、若し美しい寫眞の數葉がはさまれていたら、讀者にとつて

此の上ない喜びであつたが、これは再版に期待したい。また、秀れた歐洲の藝術品に再び簡単に接し得る日の近からんことを著者と共に祈りたい。(昭和二年五月三十日、弘文堂刊、A5、三〇四頁、二五〇回)

— 衣笠 茂 —

重澤俊郎著

原始儒家思想と經學

本書は從來の支那哲學史に飽足らず、社會的基礎と密接に關連せしめた一科學としての支那思想史を提唱する著者が、「原始儒家思想」と「經學」と異なる點を、氏獨特の社會經濟史觀から歴史的發展的にのべられたものである。

第一部原始儒家思想は、前論において周末における社會の發達と思想との關係をのべ、その中に支那思想が實際的性格をもつ理由を、苛酷な自然の下における農業生活に歸せしめているが、自然が苛酷なるが故に却つて、宗教的となる民族も多いので(例えばエヂプトの如く)、それを直ちに人間中心主義と結

びつけることは如何であらうか。又支那人が實際的現實的であるといふことは、必ずしも人間中心主義と一致しない。儒家や道家が股文化と關係深いことは著者も再三説いているが、股の宗教性に基づく天命觀は後世まで永く又廣い地盤となつて横つており、神とは縁が薄いにしても、現實の中に絶對を見出してゆくという意味の宗教性は、支那思想の根柢をなしていると思ふ。

本論第一の孔子については、夏殷周以來の社會形態や文化につき、政治權力から自由な立場で批判し、周の封建の形を存置して内容を徳治に代え、以て修正封建主義を提唱し、その歴史觀において革命原理を肯定する社會改革者。文化創造者としての孔子が説かれてゐる。右の中孔子の個人主義に見られる隱遁主義や國家權力の積極的な否定が、道家における社會否認の根本思想と異なる所以をのべているが、社會的にいつて儒家の個人主義が自適の方向に向つたものが道家なのであつて、道家が超然主義であるといふことは、決して國家社會を否認するものではないと思ふ。

第二、孟子については、最も斬新にして堅